

誰一人取り残さない地域防災

中学生の防災教育 プログラム事例集



SDGs

誰一人取り残さない
leave no one behind



ジェンダー平等や多様性配慮への気づき、 防災意識の向上

「持続可能な社会の創り手」の育成

気候変動による災害リスクが世界的に高まっています。東日本大震災では、避難所における女性リーダーの不在や性別役割分担の顕在化などジェンダーに起因する課題により、安全面、物資面、生活面において多様な人々への配慮にかけ、関連死にもつながりました。また、必要な支援や環境改善について相談することも難しいものがありました。

一方、自主防災組織の基盤となっている自治会、町内会などの地域組織は、担い手の高齢化や組織率の低下などによって硬直し、弱体化しつつあるという課題があります。

一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと（以下、地域みらいねっと）では、過去の災害を教訓とし、次世代の地域の担い手である中学生を対象に、ジェンダー視点を取り入れた防災教育をとおして、SDGs の理念である「誰一人取り残さない」地域防災をめざすこととしました。

「自然現象への対応力」×「社会の脆弱性への改善」

これまでの防災教育では、被災を乗り越えていく力を身につけるといった側面はほとんどみられず、「防災」つまり、被災してもその被害を最小限に食い止められるように知識を得、規律を体得することのみに焦点が置かれていました。

そのような中、「被災したあと、いかにその状況を乗り越えていく力を身につけるか」という観点から実施しているジェンダー視点を取り入れた防災教育は、ジェンダー平等や多様性配慮への気づき、防災意識の向上につながると考え、次世代の地域の担い手としての実践的な力量形成を企図としました。

その結果、避難所という状況下での課題解決を図る「避難所運営体験」は、参加者の臨場感や緊張感を助長し、中学生のみならず、教員や地域住民の SDGs の理解にもつながりました。さらに、教育現場からも SDGs 達成に向けた ESD（持続可能な開発の教育）の推進の教材としても認知度が高まっています。

気候変動により全国各地いつどこで災害が起きてもおかしくない現在、実践的学習による誰一人取り残さない地域防災の普及は欠かせません。

Contents

1	はじめに	1
2	地域みらいねっと×男女共同参画×防災	2
3	中学生の防災教育プログラム紹介	3
	避難所運営体験	
	避難所運営体験+ワークショップ	
	体験・ジェンダー	
	防災クロスロードゲーム・シミュレーションゲーム	
4	成果報告	10
5	地域・若年層の避難所運営訓練	11
6	Support	13
7	次に向けて	14

地域みらいねっと×男女共同参画×防災

2011年3月11日 東日本大震災

2012年～2016年 男女共同参画の視点を取り入れた防災の取り組み

この取り組みは、「あおり被災地の地域コミュニティ再生支援事業実行委員会（以下、あおり被災地）」が実施したものである。実行委員長は地域みらいねっと代表理事の小山内であり、実行委員会のメンバー等が現在、地域みらいねっと理事として関わっている。

活動の目的と内容は東日本大震災の教訓をいかして、地域防災力の向上をめざし、ジェンダー視点を取り入れた防災活動の必要性や女性リーダーの育成が必要と考え、4つの柱で取り組んだ。

①避難所運営訓練の取り組み ②地域人材育成事業 ③教材開発 ④ 情報発信事業

2017年 一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと 設立

あおり被災地の取り組みを引き継ぎ、地域、学校、行政を対象に「男女共同参画の視点を取り入れた防災」に取り組む。

以後、青森県内をはじめ、全国各地で講演活動や避難所運営訓練を実施。青森県防災危機管理課の依頼を受けて県内3箇所で女性防災リーダーの育成に取り組む。また、青森県主催の原子力災害時の避難所開設・運営訓練で男女共同参画の視点を取り入れた避難所づくりのコーディネーターや市町村の防災訓練・地域防災活動、人材育成に取り組んでいる。

2018年 防災&コミュニティカフェ開催（以後、毎年開催）

2019年～2021年 青森市内中学校で「防災教育プログラム」をのべ36校6,200人を対象に実施

2020年 令和2年度程ヶ谷基金男女共同参画・少子化関連顕彰事業にて「活動賞」を受賞

2021年3月 「東日本大震災から10年～その時、わたしは。そして未来への課題～」の開催

2021年11月 ぼうさいこくたい2021にセッションで参加（釜石市で開催）

2021年12月 第5回ジャパンSDGsアワード「特別賞」受賞

防災教育プログラム

「誰一人取り残さない地域防災をめざして」

2019年から3年に渡り、学校、地域、行政と連携しながら、男女共同参画の視点を取り入れた防災教育を実施してきました。

目的は、SDGs「誰一人取り残さない」の理念のもと、目標5「ジェンダー平等の実現」と目標11「住み続けられるまちづくり」を柱として、命の大切さをはじめ、多様性配慮、ジェンダー平等、そして災害時、中学生は地域のために役に立つ力を持っているという気づきの場となる避難所運営体験などをとおして、将来の地域防災の担い手となることをめざしました。

このパンフレットでは、地域みらいねっとが中学生を対象に取り組んだ「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」の実施内容と成果の紹介、地域住民や若年層を対象にした「誰一人取り残さない避難所運営」について紹介します。

本取り組みの成果を可視化するために、事前アンケートと事後アンケートを実施しました。



Japan. Committed to the SDGs

避難所運営体験

120分コース

70～170人



地域みらいねっとでは臨場感あふれる避難所づくりのため、会場にあるものを工夫して使用します。加えて、防災資機材を持ち込み、避難所モデルルームを作っています。

コロナ禍の避難者受入体験や要配慮者、避難者の役を担うことで、「人権や命の大切さ」、「考える力」、「判断し行動する力」について気づきの場とします。また、講話やモデルルームの説明、見学によって、多様性配慮の必要性の理解につなげています。東日本大震災時に同じ中学生が避難所で取った行動を聞くことで、中学生でも地域のために役に立つ力があることを知り、自己効力感を高め、地域のために頑張りたいという気持ちの醸成につなげます。ジェンダーの視点を取り入れた防災教育をとおして、地域防災力の向上をめざしています。

11:30	事前準備	荷物の搬入・打合せ・モデルルームの設営
12:15		休憩（給食）
13:00		役割のある生徒集合・説明・待機
13:20	コロナ禍の避難者受入訓練	・健康チェック、ゾーニング ・居住区分への誘導 ・ゾーニングの説明
13:35		モデルルームの説明（右写真参照） 非常持ち出し袋等の説明
13:50	講話1	「誰もが安心できる避難所とは」 ・感染症予防の避難所 ・過去の避難所生活から振り返ってみよう
14:10	体操	エコノミークラス症候群予防体操・休憩
14:20	講話2	「中学生が力を発揮する」 ・中学生が地域でできること ・安心できる避難所基礎知識
14:50	避難所ミニ体験・見学	・床に寝てみる体験/段ボールバット体験 ・簡易トイレ（凝固剤のデモンストレーション） ・モデルルームの見学
15:10	まとめ	今日の学びのふりかえり
15:20	終了	片付け（スタッフ、教員、一部生徒）
15:40	撤収	撤収・スタッフふりかえり

モデルルームの設営には、教員も参加。指定避難所になっている学校がほとんどの中、教員の経験も大事。なお、時間が取れる学校は生徒の参加も可能。



ポイント！
体育館の床に座りっぱなしはきついので、講話の合間に体操の時間を挟む

終了後にはスタッフミーティングを実施し、次に活かす



今までは避難所の運営は全て大人がやるものだと思っていたが、学校のことをよくわかっていて中学生だからこそ運営を手伝うことができると思った。

今までは危機感がなかったし、中学生が役に立つことはないと思っていたが、災害は誰にでも身近なものであり、中学生は大人にとっても、年下の子の役に立つ重要な役割であることを知ることができた。

私の地域は高齢者が多いので、私たちがやらなくてはいけないんだと思った。そして、災害時だけでなく、普段から地域の交流の場でも力になる。

たくさんの方の避難者は各々の問題を抱えているので、その人にしかわからないことや要求に耳を傾けることが大事だと思った。



避難所運営体験

+ワークショップ

180 分コース

30～150 人



避難所運営体験に加えて、要配慮者の支援について考えるワークショップも実施する3時間を使っているプログラムです。後半では9つの班に分かれて班別訓練も実施し、充実した体験内容となっています。しかし、避難所運営訓練は初めてという生徒がほとんどなので、各班にスタッフが入る必要があり、スタッフのマンパワーと教員の協力も必要です。

10:50	事前準備	荷物の搬入・打合せ・モデルルームの設営
11:30		要配慮者の支援について考えるワークショップ ・グループワーク ・発表
12:15	昼食	
13:20	講話	「誰もが安心できる避難所とは」 ・感染症予防の避難所 ・過去の避難所生活から振り返ってみよう ・安心できる避難所とは
13:50	班別行動の説明	・訓練説明（実施内容、避難所の区分けなど） ・班別顔合わせ
14:00	班別訓練	① 総務班（受付・情報掲示板） ② 居住スペース班 ③ 要配慮者スペース班 ④ 乳幼児世帯班 ⑤ 授乳・おむつ交換・コミュニティスペース班 ⑥ 避難所ルール班 ⑦ 聞き取り班（外国人、80代高齢者） ⑧ フェースシールド班 ⑨ 防護服班
14:30	全体訓練	① 各班からの発表（ポイント及び工夫した点など） ② 避難所見学 ③ 避難所閉鎖 ④ エコノミークラス症候群予防体操
15:00	まとめ	・生徒からの感想 ・校長先生から講評 ・生徒からお礼の言葉
15:15	終了	片付け（スタッフ、教員、一部生徒）
15:40	撤収	撤収・スタッフふりかえり

ワークショップは事前準備が必要。ワークの時間等をもう少し取れるとベスト



ワークショップの発表場面



班別訓練 簡易トイレの組立



避難者

[災害の想定]

- 青森市に 震度 6 強の地震発生。津波の可能性あり
- 住宅は全壊しており、離れたところでは、煙が立っている。けが人も避難所にやってくる
- ライフラインの状況：全市停電、全市で水道が止まっているが、下水管は何とか無事。ガスはプロパンガスは使える
- 新型コロナウイルス感染症が収束していない
- そのような中、中学生が避難者となって避難所にやってくる

コロナ禍の総合受付・一般受付

- 総合受付では、検温、健康チェック等を実施し、感染疑い者と一般避難者をゾーニング
- 発熱者と濃厚接触者は、一般避難者とは別のゾーンに誘導
- 避難者カードと健康チェック表を持参し、一般受付に提出（本来は避難所で記入するが、時間の関係で事前記入とする）

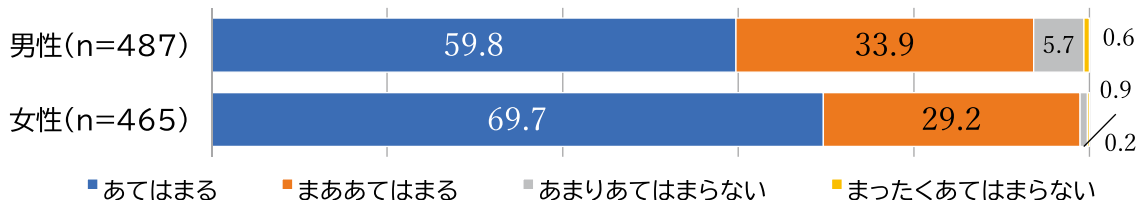
支援者

- 要援護者の同行支援者は要援護者と一緒に体育館へ移動
- 体育館内一般受付を通して、所定の避難場所へ移動、それぞれ要配慮者の状況に応じて、お世話する。
- 避難所運営スタッフの支援者は一般受付付近で待機し、要配慮者が受付にきたら、所定の避難場所（妊産婦ゾーン・乳幼児世帯ゾーン）へ誘導しお世話する。

要配慮者

- 要配慮者役は、一般避難者に混じって総合受付にやってくる。それぞれの役になり、どんな困りごとがあるか考える
- 足の不自由な高齢者（車イス使用）、目の不自由な人、状況が飲み込めず不安な認知症の人
- 臨月の妊婦、生後 1 ヶ月の赤ちゃん連れの母、子ども連れの母（3 歳の子ども、5 歳の子ども）、日本語が通じない外国人

【図1】Q 災害時をイメージして考えることができた



中学生自由記述

- ダンボールベッドやファミリーテントの作り方が分かったので、災害が起きたときは役立つ。様々な事情を抱えた人たちがいることを理解し、普段から周りのことを考え思いやる気持ちを大切にしていれば、何が起こっても優しい心で受け入れられると思う。
- 高齢者には大きな声でゆっくり繰り返して話をする。
- ゆっくりと歩くペースを合わせて誘導をする。側にいて安心させてあげる。
- 妊婦はいつ何が起こるか分からないので、専用スペースをつくり付き添いが必要。赤ちゃんが騒いでも温かく見守りたい。
- 聴覚障がい者にはジェスチャーや紙に書いてあげる。
- 高齢者や身体障がい者が立ち座りしやすいように、椅子やダンボールベッドは優先させる。
- 障がい者は避難所に来ると不安なことが多くあることがわかり、このような人を中学生が誘導していけば安心すると思った。
- 今まで自分の避難のことしか考えたことがなかったけど、支援が必要な人も避難してくるので、そういう人たちのことも考える必要があるとわかった。障がいそれぞれによって支援の仕方が違うこともわかった。
- 避難生活ではごはんを寝るところがあればいいと思っていたけど、トイレも大事だと思った。



モデルルームの設営



床に寝てみる体験



段ボールベッドに寝てみる体験（床との比較）



エコノミークラス症候群予防体操



教員自由記述

- 予定には入っていなかった「避難所を作る」ところを生徒と一緒にやって行ることができたことが、素晴らしい体験になったと思います。生徒が避難所にいったとき、ほとんどが自分の出身小学校の場合が多いので、どこに何があるかは、地域の人よりわかっていると思います。そんなときに中学生が役に立てるのではないのでしょうか。
- 何に気をつけ、どのような避難所になればよいかの知識があるのとなないのでは大きく違うはずです。今回は参考になることが多かったと思います。
- 多くの体験スペースがあり、実施してよかったと思います。準備から片付けまで担当できたことも学びにつながったと思います。
- 実物を目にしたり体験したりする場面が多かったので、生徒にわかりやすかったです。時間や環境が許せば、座るだけでも段ボールベッドの体験を全員で行いたかったです。

非常時には、平常時における固定的な性別役割分担意識を反映して、増大する家事・育児・介護等の女性への集中や、性被害・性暴力が生じるといったジェンダー課題が拡大・強化されます。また、第3回国連防災会議で採択された「仙台防災枠組2015-2030」において、災害リスク削減を基本理念とし、女性のリーダーシップを促進させることや女性の参画・能力開発が打ち出されています。そのようなジェンダーが起因する避難所等での出来事を提示し、次の災害で同じことが繰り返されることのないよう、わかりやすく伝えています。

講話スライド



固定的性別役割分担意識

- 大規模災害に直面した地域の小学校が、避難所となり、そこで被災した住民の人たちが集団で生活している様子を描いている。この避難所では、皆さんそれぞれに困難に直面していますが、どのような困難に直面しているのか？
- 避難所の運営リーダーはほとんどが男性で、赤ちゃんに必要なものの把握等ができなかった
- 避難所での炊出しは女性の役割？しかも無償？
- 物資の配布係は男性ばかりで、生理用ナプキンや下着をもらいに行きにくかった

性被害・性暴力

- 仮設トイレに行くまでの通路が暗い、また整理整頓がなされておらず、夜などは不気味な環境だったことで、性被害にあった
- 「非常時だからこれくらい我慢しなければ」と、被害に遭った人たちが、声をあげることがなかなかできなかった
- 更衣室がない、居住スペースに間仕切りがないなどで、プライバシーが守られるような環境ではなかった

安全面の問題（性暴力など）

【環境不備型の暴力】

安全でない場所で性被害に遭った女性や子供がいました。



男女別でない仮設トイレ



暗くて、整理整頓がなされていない場所の奥にあるトイレ

イラスト提供 © 減災と男女共同参画 研修推進センター GDBR

© 地域みらいねっと

「女性だから」ということで、こんなことが・・・

多くの女性が仕事をやめなければならなくなりました！

会社も被災して立ちゆきません。申し訳ないですが、パート、アルバイトさんは解雇になります。

非正規労働者の7割は女性

女性は先に解雇・失業率が増加

保育園も被災して、子どもを預ける場所がないので仕事に行けません。

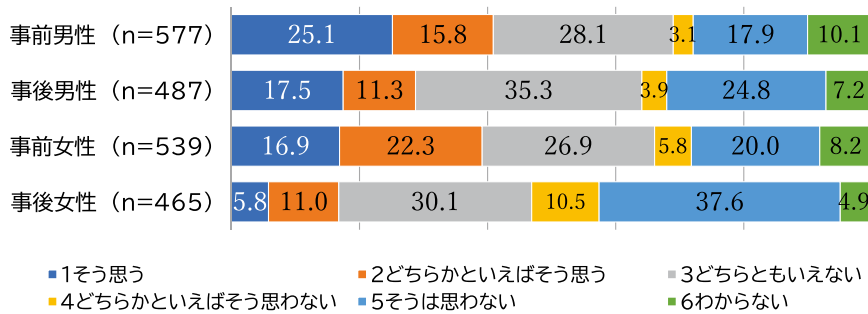
子どもやお年寄りの面倒を見るのは女性の役割でしょ!?

ケア役割の増加による女性の労働負担の増加

女性に課せられたケア役割

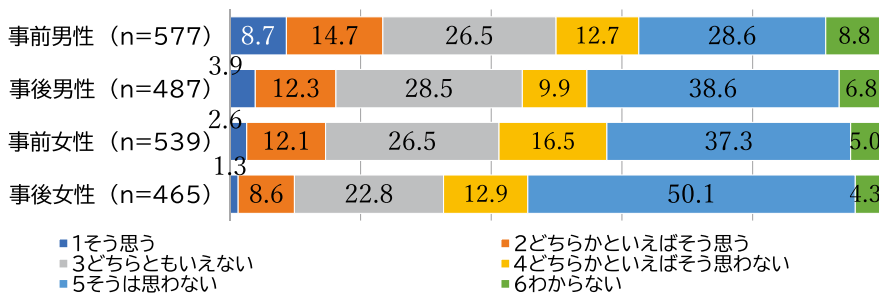
- 保育園やデーターサービス等も津波で被災し、預けることができなくなり、女性の負担が増加した
- 「子どもや高齢者の面倒を見るなどのケア役割は女性の仕事でしょう」と言われ、仕事に行けなくなったり、それによって、解雇された女性たちもたくさんいた
- 東日本大震災後、職場が被災したことでパートやアルバイトで働いていた女性たちが、先に解雇になった

【図2】Q 防災リーダーは男性が向いている



事前と事後で比較すると、図2のとおり、防災リーダーは男性が向いているに対し、「そう思わない」と回答した生徒が男女ともに増え、明確に意識の変化がみられる。また、防災教育プログラムの最後に女子生徒から「地域みらいねっとなんのように自分も防災リーダーになりたい」という発言もあった。

【図3】Q 「男は仕事・女は家庭」という考え方について



事前と事後の結果を比較すると、固定的な性別役割分担の意識に変化がみられた。図3のとおり、男は仕事・女は家庭については「そう思わない」が増えている。また、グラフはないが、日常的に必要な生活的スキルの家事について「女の人と男の人が協力してやるのが良い」という回答も事後多くなった。



中学生自由記述

- 防災プログラムを受ける前は、男性が防災リーダーに適していると思っていたけど、女性じゃなきゃ分からないこともあるので、女性がリーダーをやるのもおかしくないと思った。
- 女性と男性はいろいろ違うところがあるけど、そのことを理解し合って助け合いながら過ごしたい。
- 女子でも力仕事はできるし、男子でも繊細な仕事が得意な人がいるため、その人の特技に合わせて仕事を割り振ることが大事。
- 男性は普通に気にしないのでできることが、女性にとっては気になることがあったのが意外だった。
- 避難所で性被害にあった人がいるというのが衝撃的だった。助け合わなきゃいけないときに、自分の欲に負けていた人がいるというのは、とても情けなく感じた。そのようなことを防止する策を中学生からも提案できたらいいなと思った。
- 中学生でもどうしたらいいか、どんどん発言をしていけばいいと思う。
- 女性、男性はもちろんだが、個人としても必要とすることは違うので、個人個人に向き合うことが大事だ。
- 女性、男性に関わらず、LGBTの問題もあり差別はしてはいけないと思う。



講話「誰もが安心できる避難所とは」を聴き入る生徒と教員



教員自由記述

- 感染症対策、多様な人への配慮、男女共同参画、命の大切さ、中学生にできること等、多様な内容が含まれていてとてもよかったと思います。ぜひ、この考えを継続して学んでほしいと思いました。
- TVでは報道されない真実や話に触れ、私自身が大変引き込まれました。「中学生の力も大きな力の一つ」という言葉も響きました。まさしく、「百聞は一見に如かず」です。
- 防災教育と男女共同参画がどのように関係しているのかを中学生だけでなく、災害時に避難所の運営に関わる大人(教職員)も学ぶことができ、とても貴重な時間でした。

防災クロスロードゲーム

90 分コース

30～150 人

防災ゲームの目的は、「同じ支援で皆平等」では被害は拡大することを知ることです。それは、被災者一人ひとりが直面する問題は違うからです。ゲームでは意見を出し合い、多様な考え方を認め合うことの大切さを学び、自分が置かれた状況の中で最善を尽すことの重要性に気づきます。

また、東日本大震災時に被災地の中学生が地域の方々と取り組んだことを紹介することで、「中学生は災害時、脆弱な存在ではなく、地域のために役に立つ存在である」ことを知る機会としています。

防災シミュレーションゲーム

60 分コース

30～100 人

防災クロスロードゲーム（90 分）

導 入	1 アイスブレイク 自己紹介
	2 これまでの災害を振り返る
	① 東日本大震災 ② 熊本地震 ③ 2019年の台風19号
	3 防災クロスロードゲーム 多様な考え方や意見があることを知る。 答えは一つではない。
展 開	① 避難所には多様な人たちがやってくる ② 一人ひとりが抱える困難事項は異なるので、支援も多様 ③ 安心避難所づくりに向け、考える力を養う
	4 簡単HUG 多様な人たちが避難所で共同生活するには、互いを尊重し認め合う気持ちと思いやりが大切。
	① 7つの課題に対し、避難所での要配慮者の居住位置について考える
	5 地域のためにできること 中学生は災害時、脆弱な存在ではなく、地域のために役に立つ存在であることを知る。
	① 岩手県釜石東中学校の取り組み ② 宮城県階上中学校の取り組み ③ 青森市の避難所となった中学校の取り組み
	6 ふりかえり



防災シミュレーションゲーム（60 分）

導 入	1 アイスブレイク 2 これまでの災害を振り返る *1と2はともに防災クロスロードゲームと同じ
	3 地域のためにできること *防災クロスロードゲームの5と同じ
展 開	4 防災シミュレーションゲーム 多様な考え方や意見があることを知る。答えは一つではない。 ①東日本大震災で実際あった事例をもとに3択で質問し、一斉にカードをだす。一人ひとりがなぜ、そのカードを選んだかの理由を紹介し合う。
	5 ふりかえり



- 防災シミュレーションゲームのときに、走って逃げるか、安全なところに逃げるかなど、いろいろな考え方があることがわかりました。私は人と合わせてしまうことがあるのでこれからは自分で考え判断していきたいと思いました。
- 僕は、東日本大震災のときの記憶があまりなかったので今日の学習で災害の怖さと避難の大切さを改めて知ることができました。もし災害があったときには自分でしっかり判断していけるようにしたいと思いました。
- 普段はあまり災害の事について考えた事がなかったけど、今回の会を通して実際に配置図を作ったり、クロスロードゲームで他の人の意見を知って災害時の行動の例を知ることができました。
- 班の人と意見を話し合っているいろいろな意見があり、こんな意見もあるんだな—と思いました。
- 状況に合わせて、困っている人に手を差し伸べたり、近くの人の人に、相談することも大切だと思いました。
- 中学生でも、泣いている子やお年寄りに「一緒に避難しましょう」など一言伝え、手をつないで避難ができると思いました。

中学生の「防災教育プログラム」の成果と考察

ジェンダー視点を取り入れた防災教育（避難所運営体験）に参加した中学生が①ジェンダー視点を取り入れた市民的態度の育成、②意思決定の場に自ら参画する態度、③災害や困難を乗り越えて生きていく態度にどのような変化がみられたかを明らかにするために、事前アンケート（以下、事前）と事後アンケート（以下、事後）を実施した。なお、関わった教員にもアンケートを取っている。

1 ジェンダー平等や多様性配慮の気づき

中学生にとって体験や講話をとおして、避難所における課題解決を図る「気づきのツール」になったことがアンケート結果からも明らかになった。特に多様性配慮の避難所づくりに関しては、多くの中学生の気づきのコメント（自由記述）やそのなかで自分が何をすれば良いかの提案まで書かれていた。また、教員のほとんどから「生徒は多様性配慮の必要性を理解できた」という評価や、「中学生としてなにかができるか考えながら実施していた」などのコメントもあった。この生徒の気づきや提案が災害時の社会の脆弱性の改善にとって重要と感じた。

一方、要配慮者役を中学生が担ったが、生活上の経験が希薄であることをふまえると事前説明などの時間をもっと取ることで、より一層「要配慮者への支援」に対する理解が深まったと考えられる。

ジェンダー視点を取り入れた市民的態度の育成においては固定的な性別役割分担意識に事前と事後で変化がみられた。また、日常におけるジェンダー意識に男女差があり、男性の方がジェンダーにとらわれていることがわかった。これは、10数年間の家庭や社会によって形成されたジェンダー意識である。教育において早い段階からのジェンダー教育の必要性を示唆するものとなった。

防災における女性リーダーの必要性については事前と事後では明確に意識の変化がみられた。特に女性の方がリアルに気づき、自分ごととしてとらえることができたと推察できる。

2 教員の防災意識や災害時の対応力の向上

東日本大震災における「避難所の運営状況につい

て」（文部科学省（2012）東日本大震災における学校等の避難所運営に関する調査報告書）によると、発災直後には教職員が運営を担わざるを得なかったと記されている。そのような観点からも、本事業の防災教育プログラムをとおして、教員の防災意識や災害時の対応について知識の向上も企図し、一定の成果はみられた。

教員には、各教科の学習指導要領等に留まらず、既存の教科内容にこだわらない、被災を乗り越えていく力の育成の重要性を本事業をとおして感じ取って欲しいと考えた。教員からは「防災教育と男女共同参画の関係性が理解できた」「今後は実体験として生徒に話ができる」などの感想をいただいた。

3 “持続可能な社会の創り手”の育成

これからの防災教育には、自然現象への対応力と社会の脆弱性の改善が必要である。災害に対する女性の脆弱性、また世界と国の防災に関する政策におけるジェンダー視点の導入状況をみれば、防災教育にジェンダーの視点を取り入れることは急務である。

今回の調査の結果、避難所のモデルルームをつくることや東日本大震災時の事例を聞くことが、参加者の臨場感や緊張感を助長し、避難所運営に重要なジェンダーの課題を解決する「気づきのツール」ともなっていることがわかる。

今後の課題としては、いかにして、ジェンダーの視点を取り入れた防災教育を継続していくかである。教員のコメントに「地域の方々などのサポートを受けながら、実際に避難所運営体験を実施したほうが、持続可能な意味のある体験になると思った」という意見があった。また、地域みらいねっとだけの取り組みでは限界があるのも確かである。そのような現状からも、『地域の人々』も一緒にジェンダー視点を取り入れた防災やレジリエンスなどについて学び、取り組めるようになることが必要である。

中学校は毎年、新しい生徒が入学してくる。学校×地域住民×ジェンダー視点を持った地域みらいねっとのような団体との連携で“持続可能な社会の創り手”を育成する可能性はみえてくると思われる。



成果報告の詳細については、「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」調査報告書をご覧ください。
左記 QR コードあるいは男女共同参画地域みらいねっとのホームページからみることができます。

避難所運営訓練

180 分コース

若年層・地域住民

20～100 人



弘前大学地域創生本部ボランティアセンターと地域みらいねっとの共催で、2021 年 11 月 27 日（土）に弘前大学 大学会館 3 階大集会室において、「誰一人取り残さない避難所運営訓練」を開催しました。本講座は、男女共同参画の視点を取り入れた避難所運営訓練をとおし、弘前大学の学生や地域の方々と一緒に、避難所づくりや要配慮者の支援の仕方、コロナ禍における避難者の受入体験を実施し「誰一人取り残さない」地域防災を学ぶ防災教育プログラムとして実施しています。また、学生ボランティアも募り、準備や運営補助を担いました。テント式パーテーションおよび段ボールベットは弘前市から借用し、当日は市職員も参加しています。

8:30	事前準備	荷物の搬入・打合せ・避難所区画
9:30		受付訓練（受付、避難者カードの記入）
10:00	訓練開始 オリエンテーション	講話「誰一人取り残さない安心避難所～男女共同参画の視点で～」
10:40	デモンストレーション	コロナ禍の避難者受入訓練 非常食・防災用品の紹介 アルファ化米の実演
10:55	班分け	班別訓練内容の説明 参加者から希望をとる
11:15	班別訓練	総務・情報班 乳幼児世帯班 高齢者等要配慮者班 施設管理班（居住スペース）
11:50	全体訓練	① 各班発表 ② 避難所見学 ③ 避難所閉鎖 ④ 健康体操
12:30	総括	
12:40	終了	片付け（スタッフ、学生ボランティア）
13:00	解散	撤収

参加者の受付から訓練は始まっている。避難者カードと健康カードに記入して会場に入る。

ポイント！
班分けはあくまでも個人の主体性を尊重する。しかし、人数バランス、性別バランスも加味し、偏りがあった場合はみんなで協力し合う。



総務・情報班の避難所ルールづくりの様子
＊写真は弘前大学提供



- 講義の中で印象に残ったのは、「誰にでも平等」が被害を増やす可能性があるという部分です。色々な立場の人が集まるからこそ必要な想像力を自分自身も身につけたいと感じました。（大学生・女性）
- 避難所は辛いイメージがあったけど、各避難者にそれぞれ役割を与えて運営に参画できるようにしたら、受動的に支援を受けるだけより皆が納得感のいく避難所になるし、テントの数とか設営とかしていると仕組みも見えてくる分不満など減ると思った。みんなが作る側になってみるというのは大事だと思った。（大学生・女性）
- 弘前市の防災課の方なども関わってくださり、行政と一般の人との考え方や実情のすり合わせができると感じた。行政の方の立場でもお話を聞けるのはありがたい。（大学生・男性）

避難所運営訓練

10：30～15：30

地域住民・中学生

30～200人

*地域住民の事前学習あり

地域防災を支える自主防災会や地域住民と中学生が一緒になり実施する避難所運営訓練です。青森県階上町では2014年から男女共同参画の視点を取り入れた防災に取り組み、翌年から地域住民と中学生が一緒に避難所運営訓練を実施しています。班別訓練では地域住民が中学生へのアドバイスができる地域です。

2016年からは小規模中学校ということもあり、班別訓練では学年ごとに実施内容を固定化し、1学年は総務・情報班、2学年は施設管理、3学年は要配慮者の聞き取り訓練を実施し、中学校生活3年間で避難所に必要な多様なスキルを学んでいます。



地域住民の班別打合せ（総務・情報班）



アルファ化米の試食を兼ねた昼食（住民）



中学生を交えた班別打合せ



班別訓練（施設管理班・段ボールベットの作成）



みんなでふりかえり



避難所閉鎖作業

9：30	準備・避難所区画	
10：30	オリエンテーション	スケジュール説明 講話「安心避難所」 避難所運営訓練内容の説明
	地域住民のみ	
11：10	班別打合せ・準備	班分け・リーダーの決定
11：40	非常食の作り方（レクチャー） 非常食の昼食・休憩	
12：45	中学生受入れ下準備	
13：00	防災クロスロードゲーム	中学生・住民と一緒に実施 （右写真）
14：00	地域住民と中学生が一緒にな っての班別訓練	（3学年）要配慮者の聞き取り （2年生）総務・情報班、 施設管理班 （1年生）要配慮者班、衛生班
	地域住民・中学生合同	
14：40	避難所見学	
15：00	ふりかえり・その他	ふりかえり 避難所閉鎖 エコノミークラス症候群予防 体操 感想
15：30	終了、撤収作業	地域住民も一緒に

オリエンテーションでは「ジェンダー視点の避難所づくり」について簡単にレクチャーし、午後の訓練に活かしている。



地域住民の多くは2014年から男女共同参画の視点を取り入れた避難所運営訓練を実施していることもあり、班別訓練では中学生の主体性を尊重しながら訓練をすすめることができる。

地域みらいねっとが応援します！

このハンドブックでは、6パターンの訓練の事例を掲載しています。みなさんの学校、地域でも取り組んでみませんか。そんな時、地域みらいねっとは地域性やご要望にあったプログラムを作成し、目標を共有しながら、効果的な進め方を応援します！

地域みらいねっとでは、避難所モデルルームの設営で使用する防災資機材（下記、写真）なども備えており、青森県内であれば持参できますので、ご活用ください。なお、遠方の場合は使用備品や行政からの借用方法などの助言もできます。まずは、ご連絡をお待ちしております。

Schedule

1 打合せ（ZOOM 対応可能）

- ・開催日時
- ・実施目標の共有
- ・ご予算の検討

2 訓練までのスケジュールの提示

3 会場下見（遠方の場合は会場の写真や見取り図の提供）

- ・避難所（会場）にあるものを活用しましょう。使えるものがないか一緒に考えます

4 当日スケジュールの作成および受入れ準備

- ・当日スケジュールおよび使用備品の確認
- ・避難所レイアウトの作成

5 当日/荷物の搬入・確認

- ・荷物の搬入

6 訓練の実施

7 ふりかえり

持続可能な地域防災をめざすためには、時間があれば **ふりかえりを実施しましょう**。PDCA（Plan、Do、Check、Action）サイクルで、次につなげます！



ファミリーテントやピクトグラム



段ボールベッドや間仕切り、布団



簡易トイレとトイレテント

この他にも、ビブス、乳幼児世帯グッズ、毛布、ピクトグラム、情報掲示板事例などもそろえています。

【参考資料】

- 1) 吉田尚史、「地域防災における学校教育との連携をめぐる」。国立女性教育会館 令和3年度男女共同参画の視点による災害対応研修, P7
- 2) 寺崎里水、中島ゆり、「災害リスクを軽減する防災教育の検討ージェンダーの視点から」。生涯学習とキャリアデザイン, https://hosei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13365&item_no=1&page_id=13&block_id=83, (2021-12-10)
- 3) あomorい被災地の地域コミュニティ再生支援事業実行委員会、「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」, <http://www.aomoricombiz.co.jp/hinanjyo/>, (2021-12-10)
- 4) 外務省、「ジャパン SDGs アワード」, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/award/index.html>, (2021-12-10)
- 5) 内閣府男女共同参画局、「第5次男女共同参画基本計画第8分野」, https://www.gender.go.jp/about/danjo/basic_plans/5th/pdf/2-08.pdf, (2021-12-10)

次に向けて

私たちは「誰一人取り残さない地域防災」に取り組んできました。そのためには社会的な脆弱性の改善が必要であり、その改善をめざし、「ジェンダー視点を取り入れた防災」に取り組んで5年になります。その間、多くの方々のお力を借りしながら、一つひとつ実績を積み重ね、常にブラッシュアップしながら進んできました。その活動に対して、第5回ジャパンSDGsアワードにおいて「特別賞」をいただくことができました。

2022年は東日本大震災から11年目、地域みらいねっとの設立から6年目になります。今後も防災というツールをとおして「ジェンダー平等の実現」に向け、進んでいきたいと思います。



Japan.
Committed
to the SDGs



特別賞

一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと（青森県青森市）

誰一人取り残さない地域防災、ジェンダー視点を取り入れた避難所運営にSDGsの目標がいっぱい

【取組内容】

- ・中学生を対象に「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」を展開することで、次世代の災害時における実践的な力量を形成するとともに、男女共同参画の意識向上を推進
- ・災害時のみならず、平時におけるジェンダー平等や多様性配慮への気づき、防災意識の向上、「持続可能な社会の創り手」の育成に貢献。
- ・学内の取組に留めず、地域住民、自治体、教育委員会、女性消防団、防災士等を巻き込み、臨場感に富んだ模擬体験を行うことで、広範な関係者へも防災知識を普及

【評価ポイント】

- ・ジェンダー平等と防災教育の両面での取組推進

SDGs実施指針における実施原則（本アワード評価基準）

普遍性	ジェンダー視点を含めた防災教育は、気候変動による世界的な災害リスクが高まる中で国内外のロールモデルとなり得る。
包摂性	広範な関係者とともに臨場感のある体験を行うことで、女性や障害者等多様な方々の参画の重要性を喚起。
参画型	地域住民、自治体、教育委員会、女性消防団、防災士等と連携し活動を展開。
統合性	災害時における女性の貢献を学ぶことで、防災知識のみならず平時からジェンダー平等の重要性を喚起。
透明性と説明責任	HPやリーフレットの作成、ワークショップ等のイベント参加で幅広く活動内容を公表。外部評価も行う。



*第5回ジャパンSDGsアワードHPより引用



ホームページ「一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと」

「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」調査報告書

ジェンダー平等や多様性配慮への気づき
防災意識の向上
「持続可能な社会の創り手」の育成



「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」調査報告書



YouTube 「生きぬく力を育む～誰一人取り残さない地域防災」

発行 2022年3月15日

発行者 一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと

編集企画委員 小山内世喜子 佐藤和子 岩本ヤヨエ

事務局 〒030-0841

青森市奥野2丁目1-18-505

Tel 090-8789-2724 fax 017-775-5313

メールアドレス g.mirainet@gmail.com

ホームページ https://aomori-mirainet.com/



この報告書は、(公財)むつ小川原地域・産業振興財団の支援を受けて作成しています。

